

災害支援において私ができること 専門職としてひとりの人として（三重災害支援研究会第1回シンポジウム 紀南地域における台風被害に関する報告 第3報）

著者	中西 唯公
雑誌名	三重看護学誌
巻	14
号	1
ページ	155-157
発行年	2012-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10076/11950

災害支援において私ができること

— 専門職としてひとりの人として —

中 西 唯 公

はじめに

2011 年は災害の年となった。3 月 11 日に発生した東日本大震災から半年以上が経ち、現地では復興に向けた取り組みが進められている。三重県では9月上旬に紀南地域を中心とした台風の到来を受け、大きな傷跡を残す結果となった。

私は紀南地域の現地視察・情報収集や現地での活動を通じ、災害支援において自分ができることは何であろうかと考える機会となった。本資料は三重災害支援研究会第1回目シンポジウム資料としてまとめたものである。

1. 紀南地域を襲った台風 12 号・15 号

<台風 12 号>

- ・9月3日10時前に高知県東部に上陸し、四国地方、中国地方を縦断して日本海へ北上し、5日15時に温帯低気圧になった。
- ・動きが遅く上陸後も大型の勢力を保っていたため、西日本から北日本にかけて広い範囲で記録的な大雨となり、特に紀伊半島では8月30日17時からの総降水量が多い所で1,800ミリを超えた。
- ・奈良県、和歌山県において河道閉塞が17箇所発生した他、孤立集落が発生するなど紀伊半島を中心に甚大な被害をもたらした。



台風後の熊野市内（9月14日）

- ・死者 73 名、行方不明者 19 名、全壊 179 棟、半壊 595 棟、床上浸水 8,626 棟、床下浸水 19,197 棟の人的・住家被害（10月5日15:00 消防庁調べ）をもたらした。

<台風 15 号>

- ・9月13日21時に日本の南海上で発生し、南大東島の西海上を半時計周りにゆっくり動き、速度を速めつつ四国の南海上から紀伊半島に接近。その後、21日14時頃に静岡県浜松市付近に上陸し、強い勢力を保ったまま東海、関東、東北地方を北東に進んだ。21日夜遅くに福島県沖に進み、9月22日15時に千島近海で温帯低気圧に変わった。
- ・西日本から北日本にかけての広い範囲で暴風や記録的な大雨となった。9月15日0時から22日9時までの総降水量は九州や四国の一部で1,000ミリを超え、多くの地点で総降水量が9月の降水量平年値の2倍を超えた。
- ・庄内川の堤防の越水により名古屋市守山区に浸水被害が生じたほか、小規模な浸水被害が生じた。また、東日本大震災の被災地における仮設住宅の浸水被害をもたらした。
- ・死者 16 名、行方不明者 2 名、全壊 12 棟、半壊 17 棟、床上浸水 1,537 棟、床下浸水 3,630 棟の人的・住家被害（10月5日15:00 消防庁調べ）が生じている。（11月2日 国土交通省）



台風後の紀宝町内（9月28日）

2. 災害支援に関する私の思い

東日本大震災以降、現地ではDMATや災害支援ナース、県や市町村からの保健師の被災地派遣等、様々な専門職の活躍が報道された。多くの支援や現地住民により復興が進む被災地の状況を知りながら、日常の職務や生活、距離や時間の制約があり直接的な現地支援に係ることが難しい状況の私には何ができるのだろうかと考えていた。

3. 災害支援にむけて

1) 一人の学生との出会い

東日本大震災が発生し、現地では様々な支援が開始された頃、一人の学生から被災地の支援をしたいという相談を受けた。その学生からは熱い思いが伝わり、私は教員として人としてどのような学生支援ができるのか考えた。災害支援の現場では様々な組織が活動をしているが、その中でも学生に紹介するということから、安全・安心なネットワークと組織について情報収集を行い、次に述べる「みえ災害ボランティア支援センター」を紹介することとした。その後、学生は被災地でのボランティア活動にも参加し、積極的に活動を行っていった。

2) みえ災害ボランティア支援センター

「みえ災害ボランティア支援センター」¹⁾とは大規模災害の発生時には多くのボランティアが被災者・被災地の大きな力となるため、それらのボランティア活動が円滑に行われるよう様々な支援活動を実施する組織であり、災害発生時に設置され、官民協働で運営されている。3月11日14時46分の東北地方太平洋沖地震の発生を受けて同月14日に立ち上げられた。

4. 台風12号・15号の到来

9月上旬の台風12号の到来により紀南地域に大きな傷跡を残したことをニュース等で知った。その頃、埼玉県で行われた災害看護学会に参加し、東日本大震災での専門職の活動について改めて情報収集を行っていた私は、身近な地域が被災している状況で自分ができる災害支援は何かを改めて考えた。

5. 現地における情報収集や活動

1) 現地における情報収集

9月14日、地域・老年看護学講座教員として現地

での情報収集のために紀南地域に向かった。地域看護学実習の実習施設である熊野保健福祉所で管内の状況や対応についての情報収集を行い、熊野市保健センター、御浜町保健センター、紀宝町保健センターにおいて保健師等の職員からの情報と現地視察より現地の状況把握につとめた。

<情報収集を行って>

現地視察や関係職種からの情報収集により以下の事がわかった。

・現地の混乱状況

保健福祉事務所や保健センターも被災しており、住民の家庭訪問などをしながらも庁舎の泥だし等をしている状況であった。

・情報不足と情報発信の困難さ

土砂崩れなどで交通遮断により現地確認ができていない地域があり情報が不足していること、また、様々な対応に追われ情報発信が困難であった。

・地域住民の健康状態の把握

県健康福祉部や各市町保健師の支援により、家庭訪問や避難所訪問を実施していた。しかし、他地域の応援に行くことにより、所属保健センターのスタッフ不足も生じていた。

<情報収集から感じたこと>

現地視察と情報収集を行って現地では住民の避難状況や健康状態の把握に追われ、また、行政機関の浸水被害やライフライン復旧の遅れなどから情報発信が困難である状況を知った。現地保健師より東日本大震災での保健師派遣体制が生かされて早期から他地域の保健師が現地入りして住民の家庭訪問などを行うことができたと同った。しかし、他地域に応援に行くことにより所属保健センターのスタッフ不足が生じたり、家庭訪問などが増えた結果、通常よりも使用物品が増えることで不備が出たりと直接支援だけでなくそれらに



台風後の紀宝町内（9月28日）

対する間接的な支援の必要性を感じた。

2) 現地における活動

現地視察と情報収集を行った結果、大学としては直接支援だけではなく間接的、中長期的な支援が必要であることを感じた。現地視察により台風による被害の大きさを目の当たりにし、今、自分が何かできることはないかと考えた。

前述した「みえ災害ボランティアセンター」では9月14日からバスで現地に入り、災害ボランティアセンターの要請を受けて活動する「東紀州行き!ボラパック」の運行が行われており、9月下旬に2日間参加した。

<活動内容>

- ・浸水した個人宅の泥だし、洗浄、片づけ、荷物運び、清掃
- ・現地災害ボランティアセンターやボランティア支援センターとの連絡調整、ボランティア便のメンバーの状況把握と役割分担（各リーダーとの相談等）、報告等のコーディネーター業務

<参加して感じたこと>

実際に参加して、現地では様々な団体や自治体、企業、個人がボランティアとして活動していることを知った。一般ボランティア以外に大工や建設業、僧侶など専門的な技術をもった団体のボランティア等も現地で活動を行っていた。日常の生活地域でないところで活動するためにボランティアの健康維持や安全を確保するためのリーダーやコーディネーターの重要性、現地災害ボランティアセンターやボランティア支援センターとの連絡調整や刻一刻変化する状況を別の者に伝えていく具体的かつ有効な方法の必要性を感じた。



現地での活動の様子（9月28日）

6. 現地視察や活動を通して

私たち看護職は災害発生時の人命救助を第一に健康支援という形で関わることが多い。今回、現地において被災された方と一緒に作業する中で感じたことは「次の雨が降るまでに何とか片づけなければ」という緊張状態で自分の身体を気づかっている状況ではないということであった。健康や保健に係るニーズはまず安心して衣食住ができる環境であり、「生活を取り戻すこと」が重要である。「生活を守る」「生活を取り戻す」ことは専門職でなくてもサポートできることでもあるが、私たち看護職はその時の対象者の「生活」を考慮し、健康面からの情報収集や支援を行っていく必要があると思われる。

また、被災された方には「失う」という体験や「判断の責任」という後悔の思いが残っていることに気づいた。その心理状況には心が開放できる時間や傾聴できる者の派遣など長期的な支援が必要である。災害発生後のストレス反応²⁾では、衝撃期からはじまり、反動期、幻滅期等があり、個人と社会の適応の向上にむかっていく。その時期に合わせて表出される心理状態も異なり、災害が発生してからどの時期や社会の状況も含めつつ、精神面を中心とした長期的な心理的ケアが必要である。

おわりに

今回、県内で発生した台風被害に関して現地での視察や情報収集、活動を行い、それぞれの時期に合わせて様々な役割での支援が必要であると感じた。そのためには、一般的な情報はもちろんのこと、関係機関・職種の動きについての情報収集に努め、発信していく必要性を感じた。

災害支援活動は地域看護の基本である住民の生活を守るところにつながることを改めて実感し、平時からの地域特性を活用した地域づくりの大切さ、それにもなう専門職の支援のあり方や関係機関との連携にあらためて目を向けていくことが重要であると感じた。

URL・文献

- 1) みえ災害ボランティア支援センター：<http://mvsc.jp/>
- 2) 松下正明、牛島定信、小山司（編）：外傷後ストレス障害（PTSD）、臨床精神医学講座、S6巻、中山書店、東京、2000